

# 短期大学のコミュニケーション教育に関する一考察

## —エンターテイメント分野での授業を例に—

鹿 島 我・松 田 青 華

### A Study of Communication Education in a College — Examining the Class of Entertainment Field —

Ga KASHIMA, Seika MATSUDA

#### I はじめに

若者のコミュニケーション力の欠如が叫ばれて久しいが、その主な原因はコミュニケーション力を構築する拠点の減少にあるといえる。コミュニケーション力の構築にとって重要な二大拠点であった家庭と地域社会がその役割を十分果たせなくなっている。

まず、家庭においては、核家族化と少子化、さらに慢性的なデフレ不況による共働き夫婦の増加。さらに、離婚率の増加に伴う父子家庭母子家庭の増加などがその要因として挙げられる。一家団欒の夕食などは昭和時代を描いたドラマや映画の世界だけになりつつある。さらに住居においても、部屋と部屋の仕切りは薄い襖や障子だけという日本風住居は減少し、固くて重たい扉によって区切られた洋風住居への移行が進んだことにより、プライバシーと引き換えにコミュニケーション力を構築する機会の減少を招いている。

次に、地域社会においてであるが、要因の一つに「遊び場」の減少が挙げられる。下町の外れにあった空き地は都市開発や区画整理の名の元にマンションや商業ビルへと姿を変えてしまった。また、子どもたちの遊びも、かつては、かくれんぼ、鬼ごっこ、三角ベース、ゴム跳びなど他人数でコミュニケーションをとりながら遊ぶものが主流であったが、現在は携帯型ゲーム機やスマートフォン等の普及によりバーチャル世界の中で好きな時間に1人でプレイするという形へ変化した。ガキ大将を頂点としたピラミッド型の子ども社会は消滅してしまった。さらに、子どもに対する犯罪の凶悪化と多様化に伴い、保護者や教育関係者は子ども

の安全と引き換えに、大人との関係を拒絶せざるをえなくなってしまった。

現代社会は子どものコミュニケーション力の構築を妨げることによって形成されているといっても過言ではない。このような現状に対し、現代社会は警鐘を鳴らしている。社団法人経済団体連合会の「新卒採用に関するアンケート調査結果」(2011)によると「選考時に重視する要素」では、2位の「主体性」が62.1%、3位の「協調性」が55.0%であるのに対し1位の「コミュニケーション力」は80.2%と突出している(図1)。さらに、コミュニケーション力は2004年度の調査で1位になって以来8年連続の1位である。(図2)。

また、経済産業省が行った「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」(2010)における「社会で活躍するために必要だと考える能力要素」で、企業の人事採用担当者が「社会に出て活躍するために必要だと考える能力要素」でも3位の「主体性」13.3%、2位の「人柄(明るさ・素直さ等)」20.0%を押さえ、1位は「コミュニケーション力」23.1%である。

新たに社会人になろうとしている若者に対し、企業はコミュニケーション力の不足を指摘し、かつては家庭や地域社会が担っていたコミュニケーション力構築の場を高等教育機関に求めている。

では、この現状を大学生はどう考えているのか。同調査における「社会に出て活躍するために必要だと考える能力要素」で、学生は1位の「人柄(明るさ・素直さ等)」22.6%に次いで、2位に「コミュニケーション

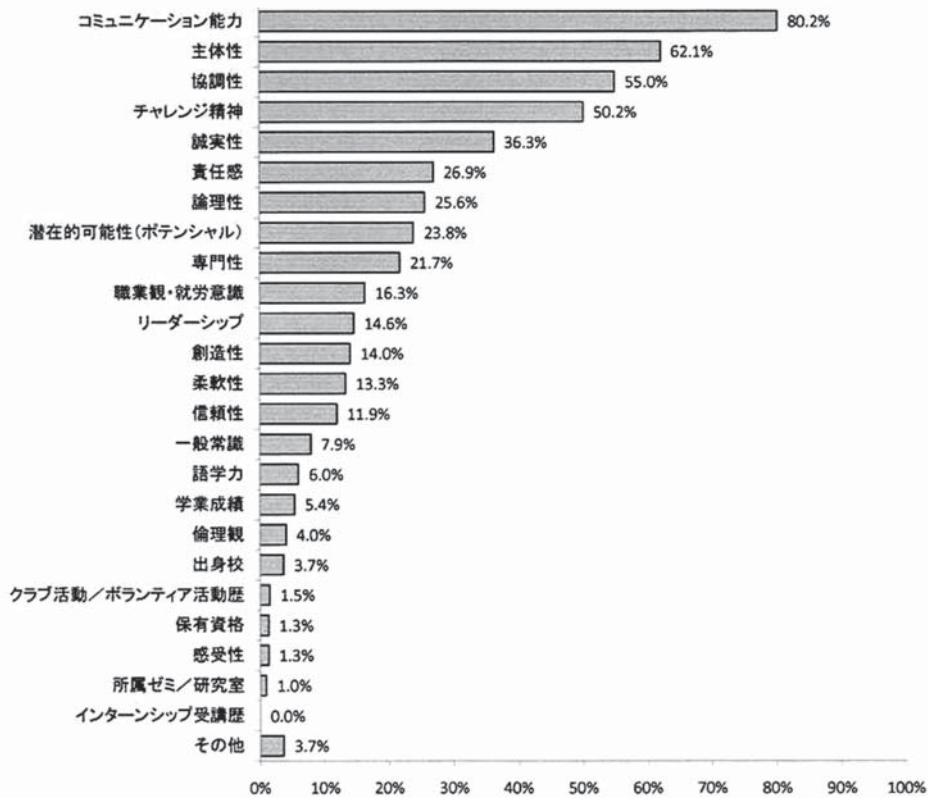


図1 選考にあたって特に重視した点 (経団連 2011)

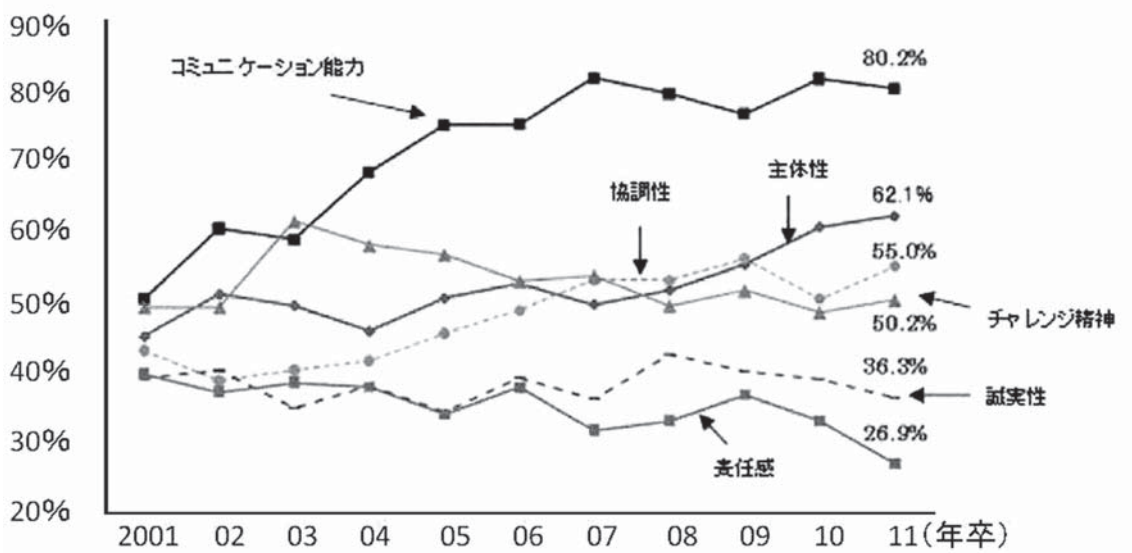


図2 「選考時に重視する要素」上位の推移 (経団連 2011)

ン力」21.6%を挙げている(図3)。1位と2位の差はわずか1%であることから、学生も社会人になるためにはコミュニケーション力が必要であると認識していることがうかがえる。

しかし、同調査の「自分に不足していると思う能力要素」で学生が1位に挙げたのは「語学力(TOEIC・

日本語力など)」である。2位は「業界に対する専門知識」、3位は「簿記」で「コミュニケーション力」は4位にすぎない。さらに、同調査では、これらの項目のまとめを「ポイント」として次のように述べている。

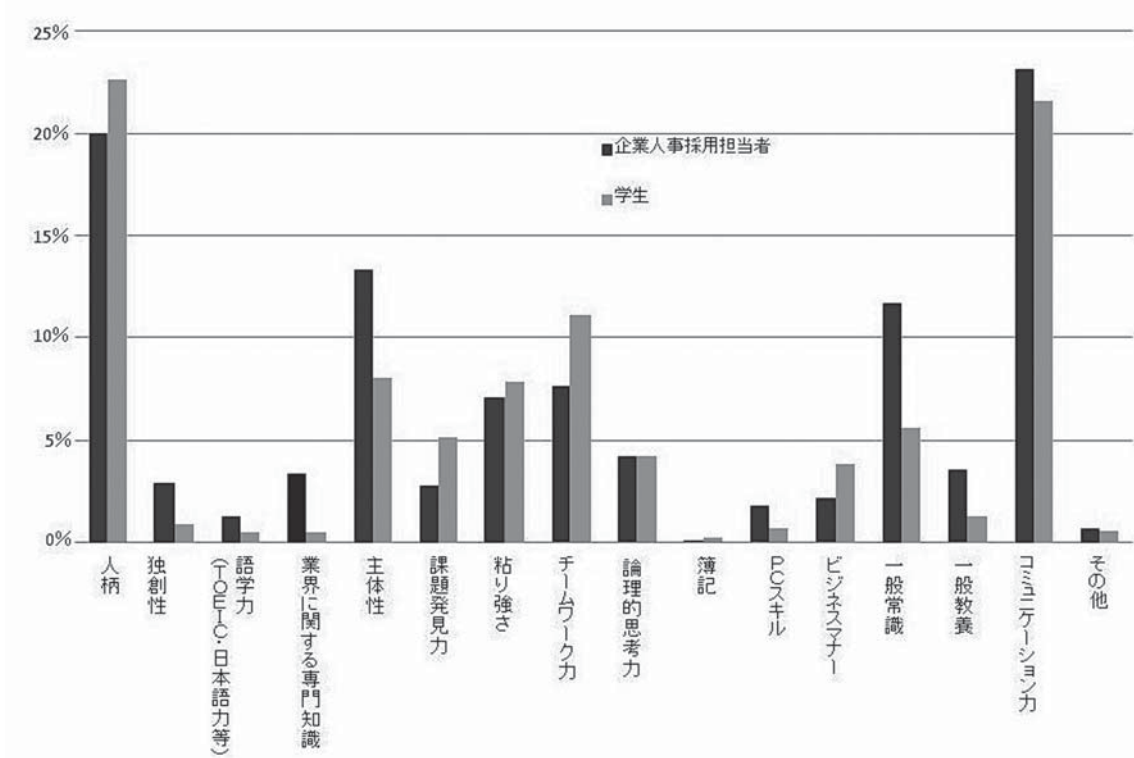


図3 社会に出て活躍するために必要な能力要素 (経済産業省 2010)

- ・企業が「学生に求める能力要素」と、学生が「企業で求めていると考えている能力要素」には大きな差異が見られる。
- ・企業が学生に対し「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション能力」といった「社会人基礎力」に類する内面的な能力要素の不足を感じている一方、学生はそれらの能力要素への意識は低く、「自分は既に身につけている」と考える傾向が見られる。

このような企業と学生のコミュニケーション力に対する認識の違いは何が原因で生じているのか。それは、コミュニケーション力そのものの考え方の違いにあるのではないかと考えられる。企業が求めるコミュニケーション力が、就業後に必要とされる取引先や営業の新規開拓において必要な「初対面の人」や「年長者」とのコミュニケーション力であるのに対し、学生が自分たちに備わっていると考えるコミュニケーション力は「友人」や「共通の趣味を持つ者」、いわゆる仲間とのコミュニケーション力であると推測される。

以上から高等教育機関におけるコミュニケーション

力の重要性と必要性は明らかである。

本研究はそんなコミュニケーションにおいて本学科で実践されている教育の報告である。エンターテインメント分野で開講されている2科目を例に考察する。

## II 短期大学のコミュニケーション教育

### 1. 短期大学生に必要なコミュニケーション力

短期大学において、求められるコミュニケーション教育とはどんなものなのか。中央教育審議会大学文化制度教育部会(2008)は、高等教育で培うべき学士の中の汎用的技能のひとつとしてコミュニケーション・スキルをあげているが、その定義は「日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる」と非常に初歩的なコミュニケーション力に限定している。

しかし、企業が学生に求めているコミュニケーション力とは、既出のアンケート結果に照らしてみても、もっと高い次元のものであると考えられる。学校教育法によると短期大学は「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成することを目的とすることができる」とある。大学が専門分野を研究

し応用力を育てることを目指しているのに対し、短期大学は社会が必要とする即戦力の育成を目指すべきである。田中（2000）は「短期大学では、卒業後、職業人または家庭人として社会で機能できる基本的な知識と能力を身につける場であり、それらを踏まえた上でコミュニケーション教育を捉えるべきである」としている。

以上を鑑みると、短期大学で求められているコミュニケーション力とは「さまざまな場面で応用が利く、より実践的なコミュニケーション力」であり、このようなコミュニケーション力を構築するためのカリキュラムが必要である。

## 2. エンターテイメント分野

本学科は、文部科学省に認定を受けた地域総合科学科である。地域総合科学科とは、実際の個々の学科の名称ではなく、従来の学科のように内容を特定分野に限定せず、地域の多様なニーズに柔軟に応じることを目的とした新しいタイプの学科の総称である。その特色の1つには「多彩な科目とコース展開」が挙げられる。分野を特定せず、学生のニーズに対応して、多彩な科目を開設。また、半年から2年間までさまざまな期間限定のコースを展開することが地域総合科学科には求められている。これに対し、本学科では2012年度、16の分野（フィールド）と180を超える科目を用意し、これに応えるよう努めている。

2010年、本学科に開設されたのが、エンターテイメント分野である。開設の目的の1つが、習得した技能で人々を喜ばせる、いわゆる“エンターテイナー”を養成することではなく、エンターテイナーを養成するための教育やエンターテイメントの世界で成功した企業について学ぶことで、社会に出るための実践力を身につけることである。

2012年度、エンターテイメント分野において、コミュニケーション力の構築をシラバスに掲げる科目は4科目、漫才のコミュニケーション演習、取材のためのコミュニケーション演習、アナウンサー演習Ⅰ、アナウンサー演習Ⅱである。いずれもエンターテイメントの世界で活躍する職業や仕事を通して、実践的なコミュニケーション力を身に付けることを目指す科目である。

本稿では、このうち、2012年度前期に開講された

漫才のコミュニケーション演習、アナウンサー演習Ⅰでの実践的なコミュニケーション教育について次章以降で論じていく。

## Ⅲ エンターテイメント分野の コミュニケーション教育

エンターテイメント分野でのコミュニケーション教育はどのように行われているのか、「漫才のコミュニケーション演習」「アナウンサー演習Ⅰ」それぞれの授業の詳細を以下に述べる。

### 1. 漫才のコミュニケーション演習

#### (1) 漫才とコミュニケーション

漫才は常識人である“ツッコミ”と常識のない人である“ボケ”が演じるチグハグなやりとりで鑑賞者（客）の笑いを誘う伝統芸能の一種であり、織田は、『上方演芸大全（2008）』の中で、その歴史は平安時代後期にまで遡るとしている。また、漫才は数ある伝統芸能の中で落語と並び、笑いに直結した最も庶民的な芸能の一つである。さらに、落語が寄席での鑑賞に限られがちなのに対し、漫才はテレビで視聴する機会が多い芸能でもある。その理由は、漫才が他の伝統芸能のように演目を伝承する芸能ではないためだと考えられる。漫才が伝承するのは“ボケ”と“ツッコミ”がチグハグなやりとりを繰り返すという形式であり、演目は、その時代時代の演者が自分たちのオリジナルを創作して演じる。そして、そのために必要なのが鑑賞者とのコミュニケーションである。漫才の演者はそれを鑑賞する者と最もコミュニケーションをとることができる演目を演じることで笑いを構築してきた。また、この際に演じられる演目は次の3種類に分類することができる。

- ・最近のニュース、話題
- ・共通体験
- ・悩み相談

演者の2人はこれらに沿ったネタを作るために、コンビを組む相手（以降相手）とコミュニケーションを取る必要がある。最近のニュース、話題について話し合い、共通体験やお互いの悩みを話し合わなければネ

タを作ることができない。時には漫才作家と呼ばれる第三者が加わる場合もあるが、最終的にネタを作りあげるのは2人だけの共同作業になる。鑑賞者とコミュニケーションを取るために相方とコミュニケーションを取る。それが漫才という芸能である。

(2) 授業内容

授業は3段階に分かれている。第1段階は漫才の楽しさ面白さを理解することを目的にする。そのためにDVDで過去の名作漫才を鑑賞し解説を加える。

第2段階は漫才を演じることに慣れる。3回のやり取りでオチをつける3行漫才や過去の名作漫才を台本化したものを演じさせる。この時点では暗記することなく、台本を読みながらの実演である。

第3段階は最終授業での漫才発表会に向けた創作活動である。台本の制作、稽古、また発表会の前には大阪にある上方演芸資料館と若手の無料ライブを見学することで気持ちを高め、最後の授業での本番に臨む。

授業内で漫才コンビ(トリオ)を組む機会が数回あるが、普段から仲のいい友人同士のコンビにならない

ように全て抽選により相方を選ぶ方法を取っている。最終授業での漫才発表会にはコンビ6組とトリオ1組が約3分間の漫才に挑んだ。それぞれ演者は自分たちの出番以外は鑑賞者でもある。大いに笑うように求めた。また、全てが終了した時点で参加者の相互投票により最優秀賞1組を決定した。

(3) 受講者

受講者は16名で全員が1年生である。漫才を本格的に勉強したことがある学生は1人もいない。全員がいわゆる“素人”である。

(4) 授業を始めるにあたって

本科目では、1回目の授業でこの日受講した学生全員に図4のようなアンケート調査を行った。

アンケート内容をコミュニケーションだけに限定しなかったのは、実践的なコミュニケーション教育を行うにあたって、学生に過度なプレッシャーを与えないための配慮である。結果からコミュニケーションに係る箇所だけを抽出すると次のようになる。



漫才のコミュニケーション演習アンケート

1.あなたは漫才を (①よく見る②たまに見る③ほとんど見ない④見たことがない) のどれですか? ( )

2.あなたは人とコミュニケーションを取るのが (①得意②得意ではない) のどちらですか? ( )

3.「2」の設問でそう答えた理由は何ですか?

4.この授業で身に付けたいことは何ですか?

5.あなたが今まで見た中で、一番おもしろいと思う漫才コンビは誰ですか?

6.現在、授業内で学外の見学(入場料は実費)を考えていますが、希望する施設はありますか?  
(例) ワッハ上方 NGK 祇園花月

以上

図4 漫才のアンケート用紙

Q2 あなたは人とコミュニケーションを取るのが

- ・得意 4人
- ・得意ではない 4人
- ・無回答 1人

Q3 そう答えた理由は何ですか？

- ・人と話すのが好きなので
- ・人と話すのが好き
- ・人見知りか激しすぎ
- ・人とはできるだけ関わりたくないから
- ・コミュニケーション力がわからない
- ・人見知り

Q4 この授業で身に付けたいことは何ですか？

- ・コミュニケーション力 3人
- ・初対面の人とも軽く話せるようになりたい
- ・会話
- ・楽しい会話をする能力
- ・コミュニケーションが大切ということ
- ・誰とでも自分らしくいられる能力
- ・人が興味を持つ話し方をしたい

Q2に関して、受講者は必ずしもコミュニケーションが苦手という学生だけでなく、得意な学生と同数であった。これは漫才という言葉に芸能・演芸好きな学生が敏感に反応したものと考えられる。Q3に関して、人と話すのは苦手ではないが、コミュニケーション力についてはあまり理解していない学生がいることを示している。Q4に関しては、この授業の受講生がコミュニケーション力とそれに付随する能力のスキルアップを目的に受講していることを示している。

## (5) 授業における留意点

### ①メリハリ

授業を進める上で留意した点はまず、メリハリである。漫才と名の付く授業だけに、おもしろい授業、楽しい授業を心がけた面もあるが、これは授業内での発表時に緊張感を与えるためでもある。普段リラックスして、楽しみながら受講している学生が、発表の際には緊張に包まれ、その中で鑑賞者との間にコミュニケーションを成立させる。ひとたび笑いが取れた（成功した）時は大きな喜びとなり、自己のコミュニケー

ション力に対する自信につながる。

### ②鑑賞者とのコミュニケーション

漫才は相方とコミュニケーションを成立させながら同時に鑑賞者（客）ともコミュニケーションを成立させる演芸である。そのため、演者としてはもちろん、鑑賞者としても積極的に授業に参加することを求めた。おもしろい時は大きな声で笑うということである。真剣に鑑賞者になるということは、真剣に演者とコミュニケーションをとるということであり、これにより、演者と鑑賞者の間に良好な関係が結ばれることになる。

### ③ビデオカメラによるフィードバック

本科目では、ビデオカメラを積極的に活用し、発表の際にはその内容を撮影し、発表後全員で視聴するように務めた。慣れない学生にとっては発表するよりも映像を視聴することの方が恥ずかしかったようだが、回を重ねるごとに客観的に自己を分析する能力が身についていった。また、その際、相互のコミュニケーションを確立させるために、自分だけでなく、相方や他の演者についても意見を述べさせ、さらにその意見に対する感想を言われた者にも求めるようにした。最初はけん制しあって批評をし合うことをためらっていたが、次第にダメだった箇所をはっきりと批判し合うようになっていった。これも実践的なコミュニケーション教育の効果と思われる。

## 2. アナウンサー演習 I

### (1) アナウンサーのコミュニケーション力

アナウンサーの活動フィールドは幅広い。テレビ・ラジオのニュース、番組司会、アシスタント、リポート、スポーツ実況、インタビュー、ナレーション、また放送局に縛られる環境でない場合のフリーアナウンサーに関しては、電車・バスなど公共交通機関の告知、ATMやカーナビゲーション、電話などの操作手順を声で誘導するのもアナウンサーの仕事に数えられる。イベントやセレモニーの司会、ホールや競技場における演目発表や、告知なども活動分野である。細かく分けると、スタジオでのリポートなのか現場での中継なのか、また生放送と収録放送では制作手法も異なってくるので必要なアナウンススキルも違ってくる。報

道取材やレポート現場の取材、スポーツ実況では競技のルールや選手の特徴なども勉強しなければならない。声で伝達するのみでなく、伝達に至るまでの理解を得るために広い分野でのリサーチも必須である。

このようにひとつの職業ではあるが、多種多様な現場でどう発信するかを臨機応変に理解しつつ、老若男女さまざまな相手と対話することが必須であるが故に「コミュニケーション力が絶対的に必要」とされる専門職である。

## (2) 学習に対する期待

鎌田 (2011) はアナウンサーの適性として「鍛えられた発声・発音」と共に「心理的な適性」もいくつか必要で、それは決して先天的なものではなく、自分を抑えて周囲に気配りを怠らず、円滑な人付き合いを実現するといった後天的に身に付くもので、要は「心構え」と「気持ちの訓練」と述べている。コミュニケーション力が非常に高いスキルで求められるアナウンサー業務の職業訓練を経験することにより、後天的に自ずと社会人基礎レベルのコミュニケーション力が備わると考えられる。声を上手に操る技法、インタビューの対話方法、司会やリポーターなどに必要な自分の考えを上手く相手に伝える手段、現場状況を素早く判断して伝えるアドリブの訓練など「さまざまな場面で応用が利く、より実践的なコミュニケーション力」が大きく身に付く学習方法だと考える。

## (3) 授業内容

コミュニケーション力の構築のために本科目ではアナウンサーの基礎となる発声、アクセント、滑舌などに加え、実践的な授業を取り入れている。講師が現役のフリーアナウンサーであることを生かし、実際の放送で使用したニュース原稿、レポート原稿などを用い、その時に体験した場面や状況説明も合わせて学生に実演してもらう。

授業の内容例を挙げると、リポーターの実践から学ぶ授業では、キャンパスを紹介するロケを行った。方法としてはいくつかのグループを構成し、大学紹介ビデオの要領で各所を各グループが案内する内容である。取材を行い、グループミーティング、ビデオテスト、ビデオ収録がこの授業の流れで、状況判断と物事を相手に伝わるように話すスキルが必要とされるリ

ポーター業務からコミュニケーション力を身に付けることが目的である。伝達する情報の組み立てや主旨をグループで話し合い（仲間とのひとつの目標に向けたグループコミュニケーション）、一緒に本番に向けて情報を伝える（臨機応変な対応力と緊張を共に分かち合った中での助け合いコミュニケーション）の流れで内向きの仲間コミュニケーションから、カメラを通じてパブリックに伝わる伝達方法で外向きの発信力を養う。

その他にもコミュニケーションに必要な「対話」を円滑に行う力を備えるためにインタビュー実践も取り入れた。人物への取材を行い、会話を発展させるための内容しかり、声の大きさ、声色、滑舌、話し方、間、インタビュー相手から話を引き出す質問方法、聞く姿勢、相手に緊張させない気持ちの余裕。発信力と傾聴力、メンタルスキルまでも必要な最強のコミュニケーショントレーニングである。

この訓練を行うことにより、まず対話をどう切り出していくのか、相手が話しやすい質問の選択、共通項の見出し、コミュニケーション力の中でも重要な「聞く」力を身に付けることになる。石川 (1996) は「相手の話しを『聞く』という行為は、当然、今度は自分がそれを受けて『話す』という行為につながります。聞きっぱなしでは、相手とのコミュニケーションをとったことにはなりません。つまり話を聞くということは<中略>ふさわしい相づちや返答をして話し手との信頼感を築く積極的な行為」としている。対話から生まれる信頼感こそがコミュニケーションであり、インタビュー実践では、先に述べたリポーター実践で養う仲間同士のコミュニケーションから一段階ステップアップして、すでに共通項を持っている関係ではない未知の“他人”に対して対話を繰り返し広げることで、社会に必要とされる実践的なコミュニケーション力を養うことになる。

## (4) 学外見学

本科目で積極的に取り入れているのが「学外見学」である。学生は任意の参加でアナウンサーが活躍するラジオ収録のゲスト出演と、テレビ番組の制作現場の見学に参加してもらった。

中でも学生ゲストとして出演したラジオ番組収録では、番組司会者やアシスタントが行った「多人数を相

手に会話を成立させるという高度なコミュニケーション」を体感することができた。会話を展開しながら緊張している相手をリラックスさせるコミュニケーションの方法をインタビューされる側として体感する貴重な経験であった。学生たちが想像以上の会話コミュニケーション力を発揮したことにより、学外見学がコミュニケーションを実践する上で大きな役割を果たすことを再認識することが出来た。

#### (5) ビデオカメラフィードバック

本演習における実践授業では必ずビデオカメラを据え置き、授業内または翌週にその内容を省みる「ビデオカメラフィードバック」を行った。リポーター実践の方法として例にも挙げたが、自己の弱点を客観視することで自己認識し、自己を向上するための自己概念に気付かせることが目的である。映像で捉える自分の姿や声、目線など、「他人が見た自分」を映像で見ることで、気付かなかった自分の癖や他人に与える印象が現れる。この方法を繰り返すことによって、自己認識力が備わり、「相手に話をする自分」を意識するようになる。コミュニケーション力を備えるには、ただマニュアルでの会話方法を身に付けるのではなく、自分自身が相手にどういう印象を与えているかを知り、弱点を克服することが必要である。中野（2012）は印象を規定する要因には、①言語情報（内容）②音声情報（伝え方）③視覚情報（見せ方）の3つがあると唱える。その全てを映し出すビデオカメラを用いた



フィードバックは、コミュニケーション力向上に必要な不可欠な手法である。

## IV 実践的コミュニケーション教育の効果

### 1. 漫才のコミュニケーション演習

漫才のコミュニケーション受講した学生には、最後の授業で「漫才のコミュニケーション演習を受講して」というテーマでレポートを提出させた。これらを検証することで、漫才のコミュニケーション演習において、実践的なコミュニケーション力が構築されたのかどうかの判断材料の一つにしたい。

なお、学生が作成したレポートは全受講者の8名分であり、記述に関しては、明らかな漢字の間違いでレポートの内容がその漢字を用いることで不明になると判断した場合は正規の漢字に訂正し、文中に個人名が出てくる場合は〇〇という表記を用いた。それ以外は原文のまま掲載するため、語調や文法、記述方法に統一感がなくなるが、この点をあらかじめ了解しておきたい。

#### (1) 学生の感想

##### ① M.S

私は、本当に昔からお笑いが好きで高校の頃から大阪へライブに行き、実際に見る事が増えました。大学へ入学し、自分がその漫才をすることになるとは、全く思ってもみませんでした。

他の芸人さんが作ったネタを自分たちでするので大変難しかったです。やり方も慣れるまでは難しかったです。それでもとうとう、自分たちで、ネタを作ることになって、さらに難しさを実感した。元々難しいものだとは思っていたけれど、2人で悩んで考えて、今思えばその時間も楽しかった。本番は、もの凄く緊張して、上手くはできなかったけれど、めっちゃ楽しかったです。

本当ならあまり話すことのない子とコンビを組んで、十分なコミュニケーション力を鍛えることが出来たのではないかを思います。それに芸人さんの気持ちも知れて、貴重な経験をしたと思います。これからの漫才も見方も変わりそうです。



## ② M.I

私が最初にこの学科に入学した理由の1つに漫才の授業を受けたいというのがありました。この授業を受けていて、人前で何かすることが楽しくなりました。

最後の授業で発表までに色々練習したりしてきて、ネタも自分で考えたりして、大変だったけど作っている時はすごく楽しかったです。練習もしっかりできていたつもりだったけど、お互い覚えられていない箇所が1つずつあってそこで本番でも詰まってしまいました。自分が作ったネタはテンポが大事だなと思っていたのでボケにすぐツッコミを入れないといけないと思うプレッシャーと人前でやる恥ずかしさで飛んでしまいました。優勝したかったので本気で悔しかったです。

今回、ネタ作りから始まり、発表をして漫才の難しさとか大変さがわかったし、芸人さんって本当にすごいなと改めて思いました。良い経験が出来ました。できるのならもう一度やりたいです。

## ③ N.O

最初の授業辺りは、実際にM-1を見たりしてとても楽しかったです。しかし、いざ自分がナイツやハライチ、パンクブーブーの漫才をしてみると、ボケとつっこみの間合いや立つ向きなど難しいなあ、と感じました。また、本当の漫才師の人はすごいと改めて感じる事が出来ました。

授業も終わりに近づき、自分たちでネタを作って漫才をしました。相方は、この授業で友達になっただけで元々仲が良い訳でもないし上手くいくかとても不安でした。

ネタ作りは共通項を出して作ろうと思ったのですが、結局私がコンビニでバイトをしているのでそれを元にしました。ネタを作るときは2人の意見が意外とすぐに合いました。ネタ合わせはあまりしないで、自然のままでするように心がけました。なのでアドリブも多くありました。

面白かったかは別として、ほぼ初対面の人と楽しく漫才をできて良かったです。それに、人前に出て話をするのが楽しくなりました。ありがとうございました。

## ④ M.K

私は、この授業で、初めて漫才をしました。漫才と

いうのは、テレビでしか見たことがなくて、イメージでは、2人で、おもしろいことを言うだけの楽しくて、楽で、バカでもできるものだと思っていました。

でも、実際は、ネタを考えるのは大変だし、そのネタを覚えて、人前で発表するのはきんちょうするし、思っていたものとは全然違いました。

きんちょうすると、覚えたネタも忘れて、グダグダになります。漫才師のネタの台本を見ながら人前でやる時は、息を合やすことだけを考えればよかったけど、自分達のネタだと、ウケるかわからないので、余計にきんちょうします。プロの漫才師は本当はとも頭が良くて、タイミングを合わせるのも上手だと気づいたので、すごいと思いました。

この授業で知らない子とコンビを組んで、ネタを合わせたりする中で、自然とコミュニケーションがとれるようになっていたと思います。この授業は楽しいだけでなく、為になるなあと思いました。

## ⑤ M.T

まず、去年の人たちのネタを見て「あ、やっぱりうちらがネタを作ったらこれくらいはすべってしまうのかな…」と、怖いなという印象でした。でも、実際やってみると皆面白くて、すごいと思いました。

ネタを作るにあたって、チームの共通項を探すことから始めましたが、ここが一番難しかったです。くじ引きで決めたために、この授業がなければ絡むことがなかっただろうと思われる方とトリオを組み、最初は非常にやりづらかったです。でも、ネタ自体を作り始めると、面白いネタを作りたい、1位になりたいという共通の目標ができ、2回ほどネタがとんだものの2位という結果が残せて、このチームで良かったです。

私たちのネタは、会話を遮るところが多々あり、日常生活ではよくやることなのに、いざしようと思うと、なかなかタイミングがつかめず、普段こんな高度な技術を使って会話をしているのかと、思いました。全チームが完璧に発表できれば、ワッハ上方で見た芸人さんよりも面白いと、自信をもって言える気がしました。

## ⑥ M.H

初めに、まったく話したこともない人と、自分との共通項を探すというのをやった時何からしゃべったらいいのかわからなかったけど、やっていくうちに慣れ

たのでよかったです。

自分たちでネタを作る時に、共通項があると作りやすいのだと思いました。実際に相方を決めてネタを作ることになった時に、全然共通項がなくて、作業が進まず苦労しました。なんとかして、ネタができて、合わせる時間が一回しかとれなかったのだからとできるかなあと不安でした。いざ本番になると、間を気にする余裕なんてまったくなくて、2回程ネタが止まるというハプニングがあって、もっと練習しとけばよかったと少し後悔しました。他のチームは、どのチームも、おもしろくて、漫才の間のとり方が、うまかったです。

私は漫才を通して、初対面の人のコミュニケーションの取り方を学べた気がします。漫才の授業をとってよかったと思いました。

#### ⑦ R.F

私の、漫才を披露しての感想は楽しく出来て、違う相方とコンビを組んでいる時よりもみんなの方をちゃんと見ながら、前のことを注意して出来たのは良かったけど、緊張しすぎて、セリフを忘れてしまったのは本当にもったいないと思いました。

台本的には、一番よく出来ているとほめてもらったのに、本当にセリフを忘れてしまったのが心残りです。もう1回したいです。でも、楽しく出来たし、貴重な経験が出来て良かったです。

みんなに練習で上手くできたやつを見て欲しかった。他の所も、みんなおもしろくて、先生もこの授業3年目やけど、この年が一番おもしろかったと言ってもらえて良かったです。

この漫才の授業で、コンビを組んで、いい相方を持って、全然仲良くなかった〇〇ちゃんとも仲良くなって、絆も深まったし、漫才の授業は、本当に楽しかったです。また、この授業を受けたいです。失敗もしてしまっただけで楽しく出来たから自分の中では合格です。

#### ⑧ Y.M

普段テレビで見ている漫才ネタを実際自分がするなんて、考えたこともありませんでした。はじめはM-1のネタを少し理解しながら見てみたり、はじめて話す子との共通項を探してみたりと、楽しく授業を受けていました。

しかし、回数を重ねるごとにみんなの前で発表したりと、これはやばいぞと思い始めました。とても短い漫才でもやはり普段テレビで見ている芸人さんとは全く違い、芸人さんが当たり前に行っているネタひとつでも、すごいことなんだと実感しました。同じネタをやっても全然違い、素人とプロの違いを身をもって理解しました。

最後の授業の発表は、プレッシャーでいっぱいでしたが、授業で習ったネタの作り方を思い出して、恥を捨て、精いっぱいやりきったつもりです。

本番は緊張で上手くいかないかなと心配していましたが、楽しんでできました。この授業を受講したおかげで、人前で話すことや発表することへの抵抗が少なくなった気がします。ありがとうございました。

#### (2) 検証

授業でしか会わないそれほど親しくない学生同士のコミュニケーションに関しては、本科目で習得できることがレポート内容から明らかである。ただし、演者と鑑賞者の間のコミュニケーションに関しては立証することができなかった。

コミュニケーション力構築のために必要な「自信」に関しては達成感とともにある程度身に付けたと考えられる。

また、自らが漫才を演じたことで漫才とそれを演じる演者をリスペクトする気持ちが芽生えたことは予想外であった。

#### 2. アナウンサー演習 I

##### (1) 学生の感想

前期授業最終に学生に行ったレポート「前期アナウンサー演習を終えて」の回答から本演習での効果を考察してみる。

なお、学生が提出したレポートは6名分で、漫才のコミュニケーション演習と同じ記述方法を採用した。

##### ① N.O

元々話すことが好きだったので、この授業をしてもっと人前などで話しをすることが好きになりました。ラジオ収録は楽しかったし、今回の司会も含めてやっぱり実践が大切だなあと感じました。アドリブとかかつぜつの悪いところを直したいと思います。

たくさんの人との出会いを大切に、これからも将来の夢に向けて頑張っていきたいと思いました。

また文章をつまらずにスラスラと読めるようになります。ありがとうございました。

### ② F.M

この科目を受講してから人前でスピーチすることに自信がついたと思っている。中でも朗読や演技（紙芝居の）等では自分の本領を発揮することができた。

先生が私の長所を評価してくださったこともたいへんうれしかった。3カ月間ありがとうございました。

### ③ R.I

やっぱり、一番身についたことは、ラジオ収録に参加したこと。最初は緊張しましたが、最終的にはみんなでワイワイ楽しく出来たととてもよい経験になりました。

あとこれからも後期を取るつもりでいますが、もう少し後期は番組収録などに参加できたらいいなあと思います。

それにやっぱりアナウンサーというものは話す！というか、やっぱり人に伝え、伝わらなくては意味がないので、私もアナウンサーみたいに、人に上手に物事を伝えたいです。そして人を感動させるように役立つ人になりたいです。

とりあえず前期の授業ありがとうございました。

### ④ M.H

アナウンサーの授業では、カメラの前で自分が話している姿をとって、後で見直すというのが多かったので、自分のことを客観的に見れたのでよかったです。

克服していきたいことは、声のボリュームを大きくすることとアドリブを出来るようになることです。後期の授業では「いろいろ売り」とかの発声練習がしたいです。

### ⑤ M.T

実践的なことを中心にしているので、人前に立つということは慣れたと思います。基礎的なことはやっていくうえで身につくのかなと思います。国語力と引き出しが足りないんですけど、アドリブはもっと上手になりたいです。あと人に見られている意識をもたな

くては・・・と。

### ⑥ M.N

発声練習などをして、声の出し方もかえられるようになったし、言葉に表情つけられるように意識するようにもなりました。

でもプレゼン大会のビデオをみて、自分が思っていたより早口だったし、顔がムスっとして、言葉に表情がなかったの、これから改善していきたいです。

実践練習やラジオ収録など、普段あまり出来ない経験ができたので履修してよかったです！

## (2) 検証

回答からうかがえるのが「アナウンサー職務実践」の必要性である。初回授業で半数に近い人数が「話すことが苦手」という理由で履修を選択したが、コミュニケーション力を備える中で必要な「話す」「伝える」「聞く」スキルが実践毎に顕著にアップしていることは明らかだった。アナウンサーを育成する過程が、様々な場面に対応出来るコミュニケーション力が高い人間を育てることに非常に役立つこと、その過程を実践で体験し、また社会と接する機会を設ける事で短期間でコミュニケーション力を身に付けることが可能であることが本演習から立証できた。

## V まとめ

エンターテイメント分野における実践的なコミュニケーション教育に一定の効果があることは学生の感想などから明らかである。今後はこの教育法にできるだけ多くの学生に接してもらえるように努力していきたい。

しかし、短大生活はわずか2年間である。エンターテイメント分野のコミュニケーション教育は演習科目が中心であるだけに一度に接することができる学生数が限られている。今後は漫才やアナウンサーだけでなく、他に開講している「声優演習」などとも協力することで受講者数を増やしていくことが目標である。

また、各種アンケート結果からも明らかであるが、エンターテイメント分野の受講者は「コミュニケーションが得意な学生」と「コミュニケーションが不得

意な学生」に二極化する傾向がある。どちらに主眼をおくかで授業内容や進行速度が大きく変わってくる。そのためにも受講者数の増加は緊急の課題であると思われる。受講者数の増加はサンプル数の増加にもつながる。そうなれば、タイプの違う学生が混在する中で明確な指導法が確立できると考えられる。

注意すべき点は、エンターテイメント分野が世間の流行等に影響を受ける分野であるということである。現在は漫才やアナウンサーなどの職種で教育を行っているが、今後、流行が変わればこれらの職種を変更する必要が生じる可能性もある。世の中の流れに敏感になっておくことが重要である。言いかえると、世間の流行に敏感に反応できる分野、これもエンターテイメント分野の強みでもあるといえる。

### 参考文献

日本経済団体連合会 2011 新卒採用（2011年3月卒業生）に関するアンケート調査結果の概要

<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/091.html>

経済産業省 2010 大卒の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shakajinkan.pdf>

中央教育審議会 2008 学士課程教育の構築に向けて 答申

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf)

田中ゆき子 2000 日本の短期大学におけるコミュニケーション教育の実態調査報告 スピーチコミュニケーション教育 13号 P33

上方演芸大全 大阪府立上方演芸資料館(ワッハ上方) 編 P14

鎌田正明 2011 あなたもアナウンサーになれる -テレビ局アナウンス採用のすべて- 講談社 P24

石川顕 1996 プロアナウンサーの「伝える技術」 PHP 新書 P62

中野美香 2012 大学1年生からのコミュニケーション入門 ナカニシヤ出版 P14